

研究

地域高齢者の役割変化の性差による特性 ～役割チェックリストを用いて～

竹原 敦¹⁾, 繁田雅弘²⁾, 山田 孝³⁾

1) 湘南医療大学保健医療学部, 2) 首都大学東京大学院人間健康科学研究科,

3) 目白大学大学院リハビリテーション学研究科, 首都大学東京名誉教授

要 旨

本研究の目的は、高齢者の役割の減少や増加などの役割変化が性別とどのような関連を示しているかを検討することであった。結果として、役割変化が性別により多様なことが示された。特に、男性は増加した役割は少ないが、家庭を守る役割が維持された。また、女性は養育者や家族の一員の役割が維持され、趣味人や組織への参加者の役割が増加した。今後、高齢者に対する役割獲得を目標とした作業療法実践のためには、性別の特徴に合わせたアプローチの視点を決定することが必要と思われる。

Key words : 役割獲得, 役割チェックリスト, 高齢者, 地域

2016年3月19日受付, 2016年5月15日受理

作業行動研究 20:32-38, 2016.

はじめに

高齢者は老化により身体的・心理的・社会的機能の低下が認められる。特に、心理・社会的機能は、精神的健康や生きがいに影響すると言われている。高齢者の心理・社会的機能については、配偶者・親族・知人の死、退職、社会・家庭からの隠居、子どもの独立など役割の縮小や減少といったいわゆる役割変化が頻繁に取り上げられてきた。

役割とは、社会及び個人的に定義された立場と、それに関連する一連の態度や行為の取り入れと定義され¹⁾、本人と周囲の人々との交流によって規定され、関係を意味するものである^{2,3)}。また、役割は、仕事だけでなく、趣味、ボランティアなどの生活のほとんどを含むもの⁴⁾と考えられる。したがって、生活上のほとんどの活動を役割とみなすことができる。

Oakleyら⁵⁾は、日常生活のあらゆる活動が役割の項目に分類できるとして、役割チェックリストを作成している。役割チェックリストは、生活上の10の役割について問うものである。その役割とは、「学生」：入学しある

いは単位取得のために学校に通うこと、「勤労者」：時間給あるいは常勤で仕事をする事、「ボランティア」：病院、学校、地域、政治活動などに少なくとも週に1回は賃金なしで働くこと、「養育者」：子ども、配偶者、親戚、友人などの養育に少なくとも週1に回は責任を持つこと、「家庭維持者」：家の掃除や庭仕事など家庭の管理に少なくとも週に1回は責任を持つこと、「友人」：友人と何かをしたり、時間を過ごすことを少なくとも週に1回は行うこと、「家族の一員」：配偶者、子ども、親など家族と何をししたり、時間を過ごすことを少なくとも週に1回は行うこと、「宗教への参加者」：自分の信仰する宗教の団体活動などに少なくとも週に1回は参加すること、「趣味人/愛好家」：縫い物、楽器演奏、木工、スポーツ、演劇鑑賞、クラブやチームの参加など、趣味や愛好する活動に少なくとも週に1回は出席すること、「組織の一員」：町内会、PTAなどの組織に少なくとも週に1回は出席すること、である。評価は2部に分かれていて、第1部は、各役割を、過去に行っていたか、現在行っているか、将来行おうとしているかの該当する欄に印を付けてもらう。第2部は、各々の役割についての価値を、まったく価値がない、少し価値がある、非常に価値があるという

役割		過去	現在
学生・生徒	パートタイムやフルタイムで学校に通学する		
勤労者	パートや常勤で賃金が支払われる仕事に就く		
ボランティア	病院、学校、地域、政治活動などに対して、少なくとも週に1回はサービスを無料提供する		
養育者	子ども、配偶者、親戚、友人などの他人の養育に少なくとも週に1回は責任をもつ		
家庭維持者	家の掃除や庭仕事といった家庭をきれいに保つことに、少なくとも週に1回は責任をもつ		
友人	少なくとも週に1回は、友人と何かをやったり、一緒に時間を過ごす		
家族の一員	少なくとも週に1回は、配偶者、子ども、親などの家族と一緒に何かをやったり、時間を過ごす		
宗教への参加者	自分の宗教に伴う宗教活動や団体に、少なくとも週に1回は参加する		
趣味人/愛好家	裁縫、楽器演奏、木工、スポーツ、観劇、クラブやチームへの参加など、趣味や愛好家としての活動に、少なくとも週に1回は参加する		
組織への参加者	生活協同組合、農業協同組合などの組織に、少なくとも週に1回は参加する		

図1 本研究で用いた役割チェックリスト日本版

3件法で回答を求めるものである。これは急性期脳卒中や認知症の人など様々な対象者への作業療法実践において用いられてきた^{6,7)}。

これまでの人生で経験してきた様々な役割の変化は、高齢者の精神的健康や満足感に対しても、影響しているものと考えられる。こうした高齢者の役割の中で、例えば、仕事、子育て、家事などの役割は、性別により価値や変化に違いがみられるのではないかと考えられる。その点を明らかにすることにより、高齢者に対する役割獲得を目標とした作業療法を妥当なものにすることができると思われる。

本研究の目的は、生活上のほとんどの活動を役割とみなし、役割の減少や増加などの役割変化が性別とどのように関連しているかを検討することである。

方法

1) 対象と手続き

本研究の対象者は、A県の6つの老人福祉施設等の通所サービスを利用する65歳以上の高齢者とした。当該地域は、第一次産業の農業を主たる職業とし、大家族世帯が多い地方中核都市である。すべての対象者に、研究の目的と内容を説明し、協力の了解が得られた者に対し調査票への回答を求めた。対象者が調査票に記入する際、各役割項目の内容等について、必要に応じて追加説明を

行った。記入を終えた後に、記入もれ等をチェックして回収した。調査期間は2007年3月～6月であった。

2) 調査票の内容

調査票は、主に役割に関する質問であった。役割の質問項目は、役割チェックリストの日本版^{9,10)}を用いた。この日本版は米国と日本との文化的背景およびライフスタイル等の違いを踏まえ、質問項目の10の役割のうち「学生」は「学生・生徒」に、「組織の一員」は「組織への参加者」に修正するなど一部、Oakleyらの原版の役割定義を修正したものである。また、本研究では、日本版の各々の役割に対する将来展望と価値を問う質問項目は用いず、「学生・生徒」、「勤労者」、「ボランティア」、「養育者」、「家庭維持者」、「友人」、「家族の一員」、「宗教への参加者」、「趣味人/愛好家」、「組織への参加者」の10項目の役割について、各役割を、過去に担っていたか否か、現在担っているかに回答を求めた(図1)。

3) 統計的分析法

最初に、役割に、性と前期高齢者および後期高齢者(以下、年齢区分)に関連がみられるかどうかを検討するため、10の役割ごとに性別と年齢区分について、 χ^2 独立性の検定を行った。次に、役割ごとに、過去に役割を担っていたが現在は担っていないを「減少」、過去に役割を担っていなかったが現在役割を担っているのを「増加」、過去も現在も役割を担っているのを「維持」、過去も現在も役割を担っていないを「なし」と役割変化パターンを

表1 各役割の性別と年齢区分のχ²検定結果

年齢区分	学生		勤労者		ボランティア		養育者		家庭維持者		友人		家族の一員		宗教への参加者		趣味人/愛好家		組織への参加者	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
男性	162	99	150	87	165	105	102	114	54	78	156	87	99	105	42	96	173	111	174	132
頻度(%)	62.1%	37.9%	63.3%	36.7%	61.1%	38.9%	47.2%	52.8%	40.9%	59.1%	59.8%	46.8%	53.2%	40.2%	30.4%	69.6%	60.9%	39.1%	56.9%	43.1%
残差	1.6	-1.6	0.8	-0.8	1.5	-1.5	2.7	-2.7	-1.1	1.1	1.5	-0.4	0.4	-1.5	1.7	-1.7	-0.6	0.6	1.6	-1.6
女性	144	117	171	114	141	117	54	108	57	63	129	72	114	72	51	129	165	96	129	129
頻度(%)	55.2%	44.8%	60.0%	40.0%	54.7%	45.3%	33.3%	66.7%	47.5%	52.5%	53.1%	48.9%	51.1%	46.9%	19.0%	81.0%	63.2%	36.8%	50.0%	50.0%
残差	-1.6	1.6	-0.8	0.8	-1.5	1.5	-2.7	2.7	1.1	-1.1	-1.5	0.4	-0.4	1.5	-1.7	1.7	0.6	-0.6	-1.6	1.6
性別の度数	306	216	321	201	306	222	156	222	111	141	285	156	171	219	147	147	338	207	303	261
性別の%	58.6%	41.4%	61.5%	38.5%	58.0%	42.0%	47.3%	58.7%	44.0%	56.0%	56.5%	47.7%	52.3%	43.5%	73.1%	26.9%	62.0%	38.0%	53.7%	46.3%

* P<0.05 ** P<0.01

表2 前期および後期高齢者における養育者の役割の性別と役割変化パターンのχ²検定結果

性別	養育者(前期高齢者) **		養育者(後期高齢者) **	
	減少	増加	減少	増加
男性	96	114	114	39
頻度(%)	44.4%	52.8%	74.5%	25.5%
残差	3.4	-4.0	4.6	-2.9
女性	54	138	72	18
頻度(%)	28.1%	71.9%	49.0%	12.2%
残差	-3.4	4.0	-4.6	2.9
性別の度数	150	252	186	57
性別の%	36.8%	61.8%	62.0%	19.0%

* P<0.05 ** P<0.01

表3 各役割の性別と役割変化パターンのχ²検定結果

	勤労者 **				ボランティア				家庭維持者 **				友人			
	減少	維持	増加	なし	減少	維持	増加	なし	減少	維持	増加	なし	減少	維持	増加	なし
男性	162	24	99	84	186	90	6	132	93	114	237	18	0	63	48	195
頻度 (%)	43.9%	6.5%	26.8%	22.8%	50.4%	24.4%	1.8%	35.8%	25.2%	30.9%	64.2%	4.9%	0.0%	17.1%	13.0%	52.8%
残差	-9	-6.2	10.3	9.4	-8.4	4.8	-1.6	0.6	1.5	2.1	4.9	-3.2	-8.7	0.7	0.6	-1.0
女性	261	78	0	0	273	36	12	114	69	81	156	39	63	51	39	192
頻度 (%)	77.0%	23.0%	0.0%	0.0%	80.5%	10.6%	3.5%	33.6%	20.4%	23.9%	46.0%	11.5%	18.6%	15.0%	11.5%	56.6%
残差	9.0	6.2	-10.3	-9.4	8.4	-4.8	1.6	-0.6	-1.5	-2.1	-4.9	3.2	8.7	-0.7	-0.6	1.0
性別の度数	423	102	99	84	459	126	18	246	162	195	393	57	63	114	87	387
性別の%	59.7%	14.4%	14.0%	11.9%	64.8%	17.8%	2.5%	34.7%	22.9%	27.5%	55.5%	8.1%	8.9%	16.1%	12.3%	54.7%
宗親への参加 ** χ ² =72.234 P=0.000																
趣味人/愛好家 * χ ² =14.390 P=0.02																
組織への参加 ** χ ² =64.092 P=0.000																
男性	168	183	18	—	39	3	99	153	48	147	18	159	45	—	—	—
頻度 (%)	45.5%	49.6%	4.9%	—	10.6%	0.8%	26.8%	41.5%	13.0%	39.8%	4.9%	43.1%	12.2%	—	—	—
残差	1.1	-2.3	4.1	—	6.2	1.7	2.6	-3.1	-0.8	5.9	-5.4	-3.6	2.7	—	—	—
女性	141	198	0	—	0	0	63	180	51	66	60	192	21	—	—	—
頻度 (%)	41.6%	58.4%	0.0%	—	0.0%	0.0%	18.6%	53.1%	15.0%	19.5%	17.7%	56.6%	6.2%	—	—	—
残差	-1.1	2.3	-4.1	—	-6.2	-1.7	-2.6	3.1	0.8	-5.9	5.4	3.6	-2.7	—	—	—
性別の度数	309	381	—	—	39	3	162	333	99	213	78	351	66	—	—	—
性別の%	43.6%	53.8%	—	—	5.5%	0.4%	22.9%	47.0%	14.0%	30.1%	11.0%	49.6%	9.3%	—	—	—

* P<0.05 ** P<0.01

定義し、分類した。そして、年齢区分と関連がみられた役割と、年齢区分と関連がみられなかった役割を示した。次に、年齢区分に関連がみられた役割は、前期高齢者と後期高齢者

ごとに、年齢区分に関連がみられなかった役割は、前期高齢者と後期高齢者を分けずに、各役割の性別と役割変化パターンとの関連について、 χ^2 独立性の検定を行った。有意水準は $p=0.05$ とした。また、 χ^2 独立性の検定の結果、有意な関係がみられたときに、どのセルに係数をもたらしめているのかを特定するために残差分析を行った。±1.96以上であれば、それぞれのセルは影響があるとされている。検定にはIBM SPSS Statics ver.20を用いた。なお、本研究は首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理委員会の承認を得て実施した(第06082号)。

結果

本研究の対象は、708名(男性369名、女性339名)で、うち前期高齢者は408名(男性216名、女性192名)で、平均年齢は69.2、標準偏差(SD)2.71、後期高齢者は300名(男性153名、女性147名)で、平均年齢は81.7、SD5.26であった。

10の役割ごとに性別と年齢区分(前期高齢者・後期高齢者)との関連について、 χ^2 独立性の検定を行った結果、「養育者」($\chi^2=7.367$, $p=0.007$)は、男性は前期高齢者が、女性は後期高齢者の比率が高かった。また、有意ではなかったものの、「養育者」と「家庭維持者」は、他の役割と異なり、前期高齢者よりも後期高齢者の比率が高かった。特に、女性の「養育者」は前期高齢者の2倍を占めていた(表1)。

次に、性別と年齢区分に独立性が認められた「養育者」について、各役割の性別と役割変化パターンとの関連について、 χ^2 独立性の検定を行った結果、残差が高かったものは表2に示す通り、前期高齢者では、男性の「減少」と女性の「維持」($\chi^2=18.699$, $p=0.000$)、後期高齢者では、男性の「減少」と女性の「増加」であった($\chi^2=74.130$, $p=0.000$)。

続いて、「養育」を除く9の役割について、前期高齢者と後期高齢者の年齢区分をせずに、各役割の性別と役割変化パターンとの関連について、 χ^2 独立性の検定を行った。性別の役割変化が有意で残差が高かったものは、「学生」男性の「増加」(26.8%, $p=0.000$)と女性の「なし」(22.8%, $p=0.000$)、「勤労者」男性の「維持」(24.4%, $p=0.000$)と女性の「減少」(80.5%, $p=0.000$)、「家庭維持者」男性の「維持」(64.2%, $p=0.000$)と女性の「なし」(18.6%, $p=0.000$)、「家族の一員」男性の「増加」(4.9%, $p=0.000$)

と女性の「維持」(58.4%, $p=0.000$)と、「宗教への参加者」男性の「維持」(10.6%, $p=0.000$)と女性の「なし」(81.4%, $p=0.000$)、「趣味人/愛好家」男性の「減少」(35.5%, $p=0.002$)と女性の「増加」(53.1%, $p=0.000$)と、「組織への参加者」男性の「減少」(39.8%, $p=0.000$)と女性の「増加」(56.6%, $p=0.000$)とであった。一方、「ボランティア」($p=0.125$)、「友人」($p=0.741$)は有意ではなかった(表3)。

考察

1. 前期および後期高齢者の役割の特徴

男女の前期および後期高齢者の役割は、後期高齢者の方が前期高齢者よりも役割を担っていることが低いことから、年齢の増加に伴い仕事や家族、組織への参加等、様々な役割が減少していることを示すものと思われる。しかし、「養育者」と「家庭維持者」の役割のみが、男女とも前期高齢者よりも後期高齢者の頻度が高かった。後期高齢者として新たに獲得されるものとして、「養育者」は、配偶者に対する老老介護の頻度が増加したことが理由と考えられる。また、本研究の対象は大家族世帯が多い地域であるため、高齢を迎えても孫の世話等を行う機会が増えてくることも一因と思われる。また、「家庭維持者」については、大家族の中で、子どもたちが仕事や家事等に時間を使う中で、家や庭の掃除や手入れなどを任せられる機会も増えてくることから、後期高齢者の役割頻度が高い理由の一つとも考えられる。これら2つの役割は、高齢者にとって新たに獲得されるものではなく、これまでの人生の中で、生活や家庭を保ち維持し続ける際に獲得されるものであるため、家族にとっても求めやすく、後期高齢者にとっても容易に受け入れられる役割ではないかと思われる。

2. 男性の役割変化

男性は、「養育者」のみが年齢区分との独立性を示したため、前期と後期高齢者に分けて、性別と役割パターンについて検討した。

後期高齢者では減少が多いものの、前期高齢者では「養育者」が「維持」される頻度が高かった。晩年には子どもを守り世話をすることは減るものの、家を守ることは継続され¹¹⁾、何かを守り維持する役割が生涯を通して継続されることを意味していると思われる。つまり、「守る」とは、男性の性役割として文化的に備わっていると考えられ、家や家族を守る遂行は、文化人類学的にも男性の行動に頻回に認められる特徴と思われる。

一方、有意に男性が増加した役割は少なく、高齢男性が女性より新たな役割を獲得することの難しさが示唆された。特に、本研究の対象となる男性高齢者は、農業に

従事している人が多いため、定年退職がない¹²⁾。現実的な心身機能の低下や大家族の中で世代交代が行われないうえに、後期高齢者の時期であっても働くことが多い。したがって、仕事以外の新たな役割を獲得する機会が、都市部の高齢者以上に少ないのではないかとと思われる。

3. 女性の役割変化

女性は、「勤労者」の役割などが減少し、前期高齢者の「養育者」と「家族の一員」が維持されていた。さらに、後期高齢女性の「養育者」は前期高齢者の2倍を占めていた。女性は子どもを生み、育てる役割は性役割として特徴的であり、いわゆる母性が維持されているのではないかとと思われる。また、今回は大家族世帯の地域を対象としたため、女性の前期高齢者は、子どもや孫の世話をする役割や家族と一緒に何かを行う役割が維持されたものと思われる。

男性と異なり増加した役割は「趣味人・愛好家」や「組織への参加者」であった。女性は男性よりも社会的で趣味などを通して仲間との交流が多く、女性が好きなことや人との交流を通して、引き続き役割獲得の寛容性が高いことを示唆するものと思われる。

4. 本研究の限界と今後の展望

本論では、対象者が調査票の項目に対し、理解できない場合などに追加説明を行った。特に、役割の定義や対象者自身が個々の役割を担っているかどうかを悩むことも多かった。役割の定義をより明確に示すことによって、より妥当な役割変化に関するデータを収集することができるとと思われる。今後は、今回得られた成果から、高齢者に対する役割獲得を目標とした作業療法実践のための性別の特徴に合わせたアプローチの視点を決定することが必要と思われる。

結論

本研究の目的は、高齢者の役割の減少や増加などの役割変化が性別とどのように関連しているかを検討することであった。結果として、役割変化が性別により多様なことが示された。特に、男性は増加した役割は少ないが、家庭を守る役割が維持された。また、女性は養育者や家族の一員の役割が維持され、趣味人や組織への参加者の役割が増加した。今後、高齢者に対する役割獲得を目標とした作業療法実践のためには、性別の特徴に合わせた

視点を決定することが必要と思われる。

文献

- 1) Kielhofner G (竹原敦・訳)：習慣化：日常作業のパターン。Kielhofner G. (山田孝・監訳)・編, 人間作業モデル 理論と応用 改訂第4版, 協同医書出版, 東京, 2012, pp.55-73.
- 2) 池田俊也, 池上直己：選好に基づく尺度 (EQ-5Dを中心に)。池上直己, 福原俊一, 下妻晃二郎, 池田俊也・編, 臨床のためのQOL評価ハンドブック, 医学書院, 東京, 2001, pp.45-49.
- 3) Blumer H. (後藤将之・訳)：シンボリック相互作用論—パースペクティブと方法, 頸草書房, 東京, 1991.
- 4) 野口富美子：農漁及び農漁村地域における高齢者の役割と生きがい。兵庫県農業総合センター研究報告 34：109-112, 1986.
- 5) Oakley Frances, Kielhofner Gary, Barris Roann, Reichler Randy Klinger (山田孝, 竹原敦・訳)：役割チェックリスト 開発と信頼性の経験的評価。作業行動研究6：111-117, 2002.
- 6) 松岡 剛, 大松 慶子, 山田 孝：脳卒中急性期から事例の将来の役割を意識して作業に取り組むことができた1例。作業行動研究19：25-32, 2015.
- 7) 篠原 和也, 山田 孝：介護老人保健施設での軽度認知症高齢者に対する人間作業モデルを用いた9ヵ月間の作業療法の効果。作業行動研究19：15-24, 2015.
- 8) 竹原 敦, 山田 孝, 石井 良和：高齢者に対する作業療法；役割獲得モデルを用いて。秋田大学医療技術短期大学部紀要2：153-159, 1994.
- 9) 山田 孝：役割チェックリスト日本試験版の検討。作業療法12：255, 1993.
- 10) 山田 孝, 竹原 敦, 石井 良和, 石川 隆志：役割チェックリスト・日本版の検討。作業行動研究6：62-70, 2002.
- 11) 水上喜美子：高齢者の主観的健康感と老いの自覚との関連性に関する検討。老年社会科学 27：5-16, 2005.
- 12) 国際公共政策研究センター 田中 直毅：10のポイントで考える日本の成長戦略, 東洋経済新報社, 東京, 2013.

ORIGINAL ARTICLE

Characteristics of Role change of the elderly by gender differences in
Community; using by Role ChecklistShun TAKEHARA¹⁾, Masahiro SHIGETA²⁾, Takashi YAMADA³⁾

1) Shonan University of Medical Sciences, 2) Tokyo Metropolitan University, 3) Mejiro University

Abstract

Objective: The purpose of this study was to determine whether relationship between role decrease or increase in elderly, that is, role change and gender differences. Methods; Research executed the investigation based on a Role Checklist Japanese version for elderly in community. The present and past ten roles was investigated. The role change, that is, decrease, increase, maintain and none of role was compared with gender differences. Results; consequently, the investigation was collected by 708 persons. Role change was shown of various aspect by gender differences. Concerning to the characteristics of male role change, the role increase was a little, and mainly they have role of Home Maintenance. The female role change, the role of Caregiver and Family Member were continued, and the role of Hobbyist/Amateur and Participant in Organizations have increased. Conclusions; For occupational therapy practice that aims at the role acquisition for elderly, research that decides the approach have to be matched to the characteristics of role by gender differences is necessary.

Key words: Role acquisition, Role checklist, Geriatrics, Community

Received on March 19, 2016, Accepted on May 15, 2016.

Japanese Journal of Occupational Behavior 20:32-38, 2016.